

鬼子母神物語訳註(上)

袴谷 憲昭

一 はじめに

面白い話は、千里を走るところか、グローバルなスケールで拡がり、深く浸透していく。そのため、そんな話になればなるほど、その本当の出処は見極め難いものとなる。弁解するわけではないが、過日も『大岡政談』の「二人の母」の淵源はインドにあるのではないかとの思いから、ソロモン伝説などは余り気にもかけず一文を草したところ、早くも山部能宣博士の御教示を得て、必ずしもそのような簡単ではないことに気づかされた。⁽¹⁾

本稿で取り上げる「鬼子母神物語」は、中東や西欧までは遡らないにせよ、インド以东のアジアに広く流布した話であることは間違いない。特に、話の主人公ハーリーティーは、インドの北の守護神であるヴァイシュラヴァナ(多聞天、毘沙門天)とその配下のヤクシャ(夜叉、薬叉)信仰と共に、中国を経由した日本では、彼女の回心後の慈悲深さゆえに、角の取れた慈母のような鬼となつて祀られているほどになっている。⁽²⁾

本稿の「鬼子母神物語」は、その流布経緯の過程で、最も詳しく編纂された、根本説一切有部の『律雜事(Vinayaksudrakavastu)』(略号:『雜事』)中の、サンスクリット原典は現存しないが、義浄訳とチベット訳では伝え

られている、主として、その後者に基³づく訳註研究である。ここで、左に、その関連文献を提示しておく。

(1) チベット訳『*Dul ba phran tshogs kyi gzhi'ur* by Vidyākaraṇābha, Dharmasrībhada, dPal byor (略号:チ『雑事』), D. ed. (略号: D), No. 6, Da. 145a4-151a1 : P. ed. (略号: d), No. 1035, Ne. 140b4-146a7 (底本はDから)。

(2) 義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』(略号:漢『雑事』)、大正藏、二四卷、三六〇頁下、二九行—三六三頁上、七行

(3) 西本龍山国訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』(略号:国『雑事』)、国一経、律部二十六(大東出版社、一九三五年)、五五九(二二二)―五六七(二二二)頁

既に示唆したように、本稿は、右文献中の(1)に主として基³づいて、それを「和訳」と「論註」として提示する研究であるが、その体裁は、基本的に、既発表の拙稿「髑髏叩きムリガシラス譚訳註」と「二角仙人譚訳註」とのそれを踏襲しているので参照されたい。⁴以下において、「和訳」は次節で、「論註」は第三節で取り扱う。その取り扱いにつき、話の内容を分かり易くするために、分節記号を加え、話は(0)段および(α)段から(ο)段までに便宜的に区分されている。

「和訳」に当たっては、原則として逐語訳に努めるが、不明などのために必ずしもそういかない場合には、達意的な訳を与えた上で、註記に説明を譲っている。チベット訳原文同士の違いについては、全てを列挙するわけではなく、必要最小限のことがのみが註記で触れられている。チベット訳原文同士における音写語の違いは、「和訳」中のカッコ内に併記されている。義浄訳は絶えず参照したが、そこには、本話の末尾の義浄訳にしかない比較長文の存在などを含む大小の相違があるにもかかわらず、「和訳」中では、それらのいちに触れることはせず、必要があれば「論註」で論及することにして、カッコ内にはチベット訳語に対応の義浄訳語もしくは一般的な漢訳語を併記する

に止められている。なお、カッコ内には、誤訳の御指摘を受け易くするためにも、できるだけチベット訳語を挿入することに努めた。また、サンスクリット語も然りであるが、原文が現存しないため、並行文例を想定した上でのそれであることに努めてはみたものの、所詮は推定の域を出るものではない一応の自目的なものであることを、ここにお断りしておきたい。

因みに、本稿でなぜ本話を取り上げたかなどを含む、本話に関して論ずべき問題は、第三節の「論註」で扱われるであろう。

二 和訳

(0) 仏世尊はラーシヤグリハ (rGyal poi khab, Rājagrha 王舎城) にあるヴェーヌヴァナ (Od mai tshal, Venuvana、竹林園) のカラランダカニザマーパ (Bya Ka lan da ka gnas pa) に滞在なやっておられた。

(a) その頃、ラーシヤグリハの都城 (grong khyer, nagara) に、サータ (Sa ta, Sāta 娑多⁽⁵⁾) といふあるヤクシヤ (gnod sbyin, yaksa 葉叉、夜叉) が住んでゐた。彼は、マガダ (mNyam dga'i, Magadha 摩揭陀) 国 (yul) の聡明な (mkhas pa can) 王⁽⁷⁾ゴンビサーラ (gZugs can snying po, Bimbisāra 影勝) と王妃 (bsun mo, devī) と王子 (gzhum nu, kumāra) と大臣 (blon po, amātya) と都城や国の人々 (grong khyer dang yul gyi mi nrams) を擁護し守護し庇護した (srung ba dang skyong ba dang skyob par byed)。彼の威力 (mthu, anubhāva) によつて、マガダ国の聡明な王⁽⁷⁾ゴンビサーラと王妃と王子と大臣と都城や国の人々には財産 (longs spyod, bhoga) が増大し (phel bar gyur cing)、彼らには常に木の花や実の所有があり (shing gi me tog dang 'bras bur idan)、雨は適時に降り、地は穀物で溢れ、食を求められるものたぎ (zas bslang ba nrams) も豊穰 (mod pa) のゆへに、それづれの村 (grong, grāma)

や都城 (grong khyer, nagara) や国 (yul, janapada) や都市 (pho brang, khor, paura) に属す⁽⁸⁾ (gr) または (dang) それぞれの国 (yul so so) に住んでゐる比丘 (dge slong, bhikṣu) やバラモン (bram ze, brahmana) や貧者 (bkren pa, daridra) や弱者 (phongs pa, vyasana) たちの全つものが、マガダ国に集まつてきて (hags te) いたが、彼らに対してもヤクシヤのサータは擁護し守護し庇護したのである。彼は、同じ種族 (rigs mnyam pa, sadṣa- kula) より妻を娶り、彼女と一緒に遊び戯れ楽しんだ (rtse dga' yongs su spyod, kridati ramate paricārayati)⁽⁹⁾。

(β) 「二方」ガンダーラ (Gan dha ra/ dGa' da' ra, Gandhara 健陀羅) 国にもパンチャーラ (Pa nytsa la/ Ban tsa la, Pañcala 半遮羅) とつうあるヤクシヤが住んでゐた。彼も、ガンダーラ国の王と王妃と王子と大臣と都城や国の人々を擁護し守護し庇護した。彼の威力によつて、ガンダーラ国の王と王妃と王子と大臣と都城や国の人々には財産が増大し、彼らには常に木の花や実の所有があり、雨は適時に降り、地は穀物で溢れ、食を求められるものたちも豊穡のゆえに、そこでも、それぞれの村や都城や国や都市に属する、または、それぞれの国に住んでゐる比丘やバラモンや貧者や弱者たちの全つものが、ガンダーラ国に集まつてきていたが、彼らに対してもヤクシヤのパンチャーラは擁護し守護し庇護したのである。彼もまた、同じ種族より妻を娶り、彼も彼女と一緒に遊び戯れ楽しんだ。(γ) それからしばらく後のこと (de nas dus phyi zhig na) ヤクシヤのサータとヤクシヤのパンチャーラの二人は、ヤクシヤたちのヤクシヤ集云 (gnod shyin 'dus pa) に行つて、そこでその二人は互いに友人 (mdza' bo, suhrd) となつた。ヤクシヤのサータは彼 (パンチャーラ) に時々マガダ国の花や実などを贈り物 (skyes) として送つた (oskur)。ヤクシヤのパンチャーラもヤクシヤのサータにガンダーラ国の花や実を贈り物として送つた。その二人がこのようにして互いに親しくなつてから、その二人は後でヤクシヤ集会に行つて、ヤクシヤのサータが「パンチャーラに」「伴侶 (grogs po, sakh) だ、農^わ二人 (yu bu gnyis) が死んだ後だ (dus las 'das kyang) 子 (bu) や孫 (sha bo) や曾

孫 (yang tsha) や玄孫 (sum tsha) たちが友情を断ち切ることなくやつていへぬ手段 (thabs, upaya) が一体あるものだろうかの。」と云うと、ヤクシャのパンチャーラは言った。「伴侶よ、同感 (legs so, sadhu) だ。儂もそんなことを考えていたぞ。だから、「子供の」生まれないうちから (ma skyed pa las) 縁戚となつて (gnyen du byas te) 、「それなら (de ste) 儂に男の子 (bu pho zhig) が産まれ (bsas la) 、「御主に女の子 (bu mo zhig) があつたよ、御主は儂の息子 (bu) に「娘を」与えればよく、逆に (on te) 御主に男の子で儂に女の子の場合には、儂が御主の息子に「娘を」を与えればよい。」と。彼 (サータ) は答えた。「伴侶よ、同感だからそのようにしよう。」と。その二人は互いに「子供の」産まれないうちから (ma bsas pa) 縁戚となつて立ち去つた。

(6) それからしばらく後のこと、ヤクシャのサータの妻は子を孕み (sems can dang ldan par gyur te, apama-sattva samvitta) 、「彼女は九か月を経て女の子を出産した。姿形素晴しく見目麗しい女の子であつて (dhyātib legs shing blta na sdug pa bzang mo, abhirūpa darsaniya prasādika) 、「彼女が産まれると、ヤクシャの全ての種族 (rigs, kula) が喜んだのよ。」と。彼女を自分の種族と等しく (bodag gi rigs dang 'dra ba) 相続も同一とあつた (rgyud gaig pa) 、「たゞは、産まれたもの (bsas pa) の誕生祝宴 (bsas ston chen po, jāti-maha) を催して名前を付けよう。」と云つた (ming 'dogs pa la zhugs) 。「この女の子にどんな名前を付けようか。」と相談がなされる (dga' bar gyur) 、「仲間たゞ (gnyen bshes dag) は、「『子』が産まれたとき、ヤクシャの全ての種族が喜んだ (dga' bar gyur) 、「歡慶) ので、それゆゑに、この女の子は名前をラティ (dGa' byed ma, Rati) 歡喜」と付けよう。」と云ひ、「彼女の名前はラティと付けられた。かくして (a' khar) 、「ガンダーラ国のヤクシャのパンチャーラは、ラーシヤグリハにおいてヤクシャのサータに女の子が産まれたと聞いてから、彼は思った。「儂の伴侶に女の子が産まれ、その女の子は儂の義娘 (ma' ma, vadhū) になつたのは確かだから飾り物を送るのが当然だ。」とて、彼はヤクシャのサータに、「伴

侶にして友人よ (grogs po mdza' bo, sakhe subht)、「私は貴台に娘が産まれたと聞いて非常に喜んでおります。私は伴侶の娘に衣服と飾り物を送りますので、これをお受け取り下されば幸いです。」と、手紙 (s. ge) を書き送った (spring)。「彼は手紙を読んで (bkriags te/ btags te) 返事として (sar yang) 伴侶よ、私共は縁戚ですから、それで (de ste) 貴台に男の子が産まれましたら、これ (di) はそちらのちのちのもの (de nyid ky) です。」と書き送った。ヤクシヤのパンチャラはそれを読んで、「男兒 (bu) をきくと (nam) 得るのだ。」と常に思って、妻と一緒に遊び戯れ楽しんで。

(3) 彼 (パンチャラ) には、遊び戯れ楽しんだ結果、男の子が産まれ、彼をまた自分の種族と等しく相続も同一であるとするものたちは、産まれたものの誕生祝宴 (bsas ston, jab-maha) を盛大に (cher) 催して、名前を付けることにした。「この子にどんな名前を付けようか。」と相談したところ (bgras pa las) 仲間たちは、「この子はヤクシヤのパンチャラの子供であつて、それゆえに、この子の名前は、パンチカ (Pä nysti ka, Ban tsi ka, Päñtka' 半支迦) と付けよう。」と言つて、彼の名前は、パンチカと付けられた。かくして、ラージャグリハのヤクシヤのサータは、ガンダーラ国のヤクシヤのパンチャラに男の子が産まれたと聞いて、彼は、「私の伴侶に男の子が産まれて『その子』必ずや (gdon mi za bar, avasyam) 私の娘婿 (mag pa, jamatr) になるであらう。」と置いて、彼は彼に衣服と飾り物を送り、「伴侶よ、私は貴台に息子が産まれたと聞いて非常に喜んでおります。私は伴侶の息子に衣服と飾り物を送りますので、これをお受け取り下されば幸いです。」と手紙を書き送った。彼 (パンチャラ) は手紙を読んで、返事に (sar gyi lan) 「結婚式 (bag ma blang ba'i ston mo) の準備をなやめて下さい (sta gon gyis sing)。」と書き送ると、ヤクシヤのサータは手紙を読み、「同感だから娘のラティーを私は予め (sngar) 与えることにしよう。」と思つた。

(c) 彼(サータ)は、彼女(ラティ)が生まれてからも、妻と一緒に遊び戯れ楽しんだ。彼には、遊び戯れ楽しんだ結果、妻は「また」子を孕み、それがいつであつたにせよ、子を孕んだ正にその日に、山(r̄i, gr̄i)でクラウンチャ鳥(khrung, khrung, kraunca)が声を出した。彼女は九か月を経て男児を出産した。姿形素晴しく見目麗しい男の子であつて、産まれるや否や、またも山でクラウンチャ鳥が声を出した。その「子」を自分の種族と等しく相続も同一であるとするものたちは、⁽¹⁷⁾産まれたものの誕生祝宴を盛大に催し、名前を付けることにして、「この子にどんな名前を付けようか。」と相談したところ、仲間たちは、「このものは、母胎(mngal)に入つたときにも山(r̄i, gr̄i)からクラウンチャ鳥の声が出、産まれたときにも「山から」クラウンチャ鳥の声が出た一方、父もサータといわれており、それゆえ、この子は名前もサータギリ(Sa ta gr̄i, Sa tagri⁽¹⁸⁾、娑多山)と付けよう。」と言つて、彼の名前をサータギリと付けた。そのサータギリという子は養ひ育てられて(gsos skyed de)成長したが(Cher gyur ba dang)、『⁽¹⁹⁾そのついでにそのついでに(ji tsam)』しばらく後のこと、ヤクシャのサータは王妃と共に亡くなつてしまった。

(7) サータギリが家長(Khyim gyi bdag po, gr̄i hadpa)になると、ヤクシャの娘(bu mo, duhr̄i)であるラティーがサータギリに、「弟(ming bo, bhr̄it)よ、「私は」ラージュグリハに住んでいる多くの人々が子を産むたびにそのものたちをそのついで奪ひつ(bsas shing btsas pa dag phrog shing phrog nas)食ふように欲してしまふ。」と言つ、「弟の」彼は、「姉上(sring mo, bhagin)」、私共の父はマガタ国の聡明な王ピンピサーラと王妃と王子と大臣と(村や)都城や国の人々を常に擁護し守護し庇護したと聞いており、私共は「それらを」しっかりと保護すべきが当然であつて(rab tu bsrung bar bya bai rigs te)、『⁽²⁰⁾これは私共の領域(spyod yul, gocarā)なのですから、⁽²¹⁾ここで他のものたちがなにか馬鹿げたこと(cig kyal ka/cig rgyal ka)をなすうとして、それに対して私共は阻止する(dgag pa)のが当然ですのに、なぜ貴女はそのようにするのですか。不正に貴女が心を起しても(sems bskyed pa)』それを回避

すなわち「下やう」(sar zlog)と命じた。「しかし」彼女は、誤った願 (log pa'i smon lam, mthya'prañidhāna) の熏習 (bag chags, vasana) による被着 (gos pa, sannaddha) のために、やさしくなることができず、「(gungs su ma btub ste) 再びサータギリに、「弟よ、「私は」ラージャグリハに住んでいる多くの人々に子が産まれるたびにそのものたちをそのつど食べようと望んでいます。」と言つと、サータギリは、彼女の前世による支配のために「姉を」やさしくさせることはできな⁽²⁰⁾と知つて「これは後々「私は」常に阻止できないけれども、これを父も「知つてつ」予め与えて結婚に備えたのだ (bag mar grang)」と思つた後で、彼はヤクシャのパンチャーラに、「姉 (bu mo) のラティーは適齡期の女性 (na chung, yuvati) になりましたので、こちらにいらつしやつて結婚⁽²¹⁾して下やう (bag ma long shig)」と手紙を書き送つたところ、かのヤクシャのパンチャーラは、ヤクシャの王子パーンチカに大吉祥 (dpal chen po) を結び付け、結婚⁽²²⁾してから (bag ma blangs nas) 、「ガンダーラ国に連れ歸つた (khridd)。

(θ) 「ガンダーラ国に歸つてから」ヤクシャの王子パーンチカは彼女と一緒に遊び戯れ楽しんだ。「その後、パーンチカの」妃はいつも親しみつつ信頼し喜んで意の安樂が多くなつた、その時になつて (dei tsho) 、「貴男 (bo, aarya) 、「私は」ラージャグリハに住んでいる多くの人々に子が産まれるたびにそのものたちをそのつど奪つて食べようと望んでいます。」と言つた。すると、彼は答えて、「佳女 (bzang mo) よ、そこ (ラージャグリハ) は貴女の縁戚の住処 (sma) であつて、そこで他のものたちがなにか馬鹿⁽²³⁾したこと (gig kyai ka/cig rkyai ka) をなぞつとつても、それを私共は阻止するのが当然ですのに、貴女はなぜそのようにするのですか。貴女が不正なことで心を起しても、それを回避するやうにして下さ⁽²⁴⁾よ (sar zlog shig)」と命じた。それでも、彼女は、前世の (sngon gyi, pūva) 誤つた願による熏習の被着のために、「止して (sodog cig)」と言つたまま、なにも言わずに坐つていた。彼女は、ヤクシャの王子パーンチカと一緒に遊び戯れ楽しんだ結果、男の子を産んで、その誕生祝宴を盛大に催して (btsas ston

chen po rgya cher byas te) 種族に相応しい名前を付けた。同じようにして、二番目三番目より五百番目の子に至るまでのものを産んで、それら全ての中の一番小さなもの (tha chungs, kan'iyas) に名前をシタ (dGa' byed, Rata 愛児) と付けた。

(1) その後、「彼女は」子供より威力を得るようになり、そこで、パーンチカが引き止めても (bzlog kyang) 引き止められなくなり (ma zlogs nas) 、彼女は喜ぶこともなくなってしまうので、言うこともできずに坐っていた。その後、ヤクシャ女 (gnod sbyin mo, yakshin) のリチーは、⁽²⁷⁾ どうでも好きなように自ら思ひまわすに (gar dga' bar rang nyan du) 行ったり来たりして住むようになった。

(K) 彼女がラージャグリハに「住んでいる」多くの人々に子が産まれるたびにそのものたちをそのつど奪って食べ始めると、ラージャグリハに住んでいる多くの人々は、ビンビサーラ王に、「王様 (tha)、私共の子が産まれるたびにそのものたちをあるもの (og) が奪っているものとすれば、だれが私共に被害を加えているのかを問います (rna ba) のが当然でございます。」と申し上げると、王は、全ての住処を管理するものたち (gnas thams cad dbang ba mams) に対して、「やめ (kye) 、ラージャグリハに住んでいる多くの人々に子が産まれるたびにそのものたちをだれが奪っているのかを掘り出すがよい (mossmos shig) 。」と命じ、その後、彼らが熱心に怠ることなく問ひ質しにかかる (rmed pa la zhugs pa) と、しげらへして、彼らも奪うようになつて、被害が大きくなり、被害は更に大きくなって、およそだれかの娘が子を孕むと、その「親」は「娘を」他国 (yul ghan) に引き移して置いた (phyung ste bzhang pa) 。すると、大臣たちはビンビサーラ王に、「王様、被害が大きくなって、およそだれかの娘たちが子を孕むと、その「親」は「娘を」他国に引き移して置いております。」と申し上げた。そこで、王は占い師 (tas pa) を呼び集めて (bkug ste) 言ったところ、彼らは、「王様、ヤクシャが怒ったので、「それを鎮めるため

に]ヤクシヤの住処に供物 (gtor ma, bath) を供え (stsäl la) 供養 (mchod pa, puja) と尊敬 (bkur stü, satkara) をなすものちうにして下す。」と申し上げた。王は大臣たちに「⁽²⁵⁾やあ (kye) 行ってラーシヤグリハの都城に布告 (dri bgrags pa, ghanñāvaghosana) をなせ。ラーシヤグリハにいる全ての多くの人々やそれぞれの国より集まった全てのものたちがヤクシヤの住処に供物を与え (byin la) 供養と尊敬をなせ。」と命じると「彼らもそのように布告して (dri bgrags te) 」「⁽²⁶⁾やあ (kye) 」「ラーシヤグリハと都城やそれぞれの国より集まった人々は聞くがよい。王様はかく、「余の国にある都城やそれぞれの国より集まった多くの住人全ては全てのヤクシヤの住処に供物を与え供養と尊敬をなせ。」と仰せである。」と命じた。すると、ラーシヤグリハに住んでいる多くの人々は、それらの都城を、石 (rdo ba, paśāṇa) や砂利 (gyo mo, śārkara) や土石 (sa rdo, kāṭhalla) を除き (phyags te, apagata) 、「梅檀の水で散布し (tsan dan gyi chus chag chag btab nas, candana-vāri-parisikta) 、「好じ香の香炬 (dri zhim poi i pog phor, surabhi-dhūpa-ghāṭika) を備へ (so sor dpyangs/spyangs, upanibaddha) 、「旗 (rgyal mtshan, dhvaja) や幡 (lhai phan, patāka) を立て (sgreng, uechrita) 、「多への旗房 (dar gyi lda ldi mang po) を吊し (dpyangs/spyangs te) 、「種々の花で埋め居し (me tog sna tshogs kyis gtor nas, nānā-puspākṛma) 、「神々の遊園 (skyed mos tshal, udyāna) 」「⁽²⁷⁾あゝトウシタ天 (dGa ldan, Tusita) の⁽²⁸⁾やうに飾じた (mdzes par byas, ramanīya) の⁽²⁹⁾であらう。

(一) かくして、ヤクシヤの全ての住処は供物が与えられ供養と尊敬がなされたが、しかしながらラティイーが死ぬことはなかった。するとラーシヤグリハに住んでいる神々は、「ラーシヤグリハに住んでいる多くの人々よ、あゝ (kye) 貴方「たち」 (khyed) に対してヤクシヤ女のラティイーが貴方「たち」の子供たちを奪っているが、貴方「たち」全てが世尊の面前に行くと、世尊が彼女を調伏なさるだらう。」と示したのである。彼らは、「あゝ、彼女はラティイーではなく、ハーリーティー (Phrog ma, Haritī⁽³⁰⁾ 訶利底) であつて、彼女が私共の子供が産まれるたびにそのものたち

を奪つたのだ。」と言うと、彼女のラティーという名前を転換して (dog ste) ‘ヤクシャ女のハーリーティーと名前を変えてしまった。それから、ラージャグリハに住んでいる多くの人々は、世尊のいらつしやるところへ行つて到着すると、世尊の御足に頭で礼拝して、「世尊よ、このヤクシャ女のハーリーティーは、ラージャグリハにいる多くの人々に対して、久しい間 (yun ring po nas, ciram) ‘対立せよ⁽²⁾の (ma khon pa) には対立し (khon) ‘敵ならよ⁽²⁾の (dgarar ma gyur pa) には敵となり (dgarar gyur) ‘親切なら⁽²⁾の (snying ma rings pa) には親切ならよ⁽²⁾の (ma chab) ring bar gyur) ‘彼女は、子供が産まれるたびにそのものを奪つたので、慈悲深き (thugs rje can, karuṇāvat) 世尊は、お慈悲のゆえに (thugs brtse bai phyir, anukampām upādāya) ‘ヤクシャ女のハーリーティーを調伏するよ⁽²⁾の御承認してよ⁽²⁾の (ci gnamg) ‘と申し上げる。世尊はなにも仰らなご⁽²⁾の (cang mi gsung ba bzhin, tūṣṭimbhavana) ‘ラージャグリハに住んでいる多くの人々のために (Gyal poi khab na gnas pai skye bo mang po dag la, sambahulānām janānām Rājagṛīhākanām) ‘ヤクシャ女を調伏することを」御承認なされた (gnang, adhiśāyati) ‘。それから、ラージャグリハに住んでいる多くの人々は、世尊がなにも仰らずに御承認なされたと知つて、世尊の御足に頭で礼拝して世尊の面前より去つた。

(μ) かへつて、世尊は、午前中に (nga dro, pūrvāhne) 下着 (sham thabs, nivāsana) と法衣 (chos gos, āvara) をお召こになり (mnabs) 鉢 (hung bzæd, patra) を持ち給つて (bsnams nas) ‘ラージャグリハに乞食のために (bsod snyoms kyi phyir) お出かけになられて (gshags te) ‘ラージャグリハから乞食よりお戻りになられた後で (slar bskor nas) 食事をなし (zas kyi bya ba byas te, kṛta-bhakta-kṛtya) ‘食後に乞食するのを止めて (bsod snyoms phyis len pa spangs te, paścād-bhakta-piṇḍapāta-pratīkrānta) お出かけになられ、ヤクシャ女のハーリーティーの住処の⁽²⁾の (sgrub pa) へいらつしやつた。その時、ヤクシャ女のハーリーティーは息子のラタを家に置いて「自分の」領域

(spyod yul, gochara)⁽²³⁾に出かけていた。すると、世尊は、彼を鉢で覆つて置いて (bkab ste bzhangs nas) 'まなぶ(24) [ラタ以外の] 子供たちはぞ [のラタ] を見ることができないが彼 (ラタ) には彼ら全てが見えるように、そのように制御なされた (byin gyis brlabs, adhiṣṭhātī)°。その直後に (de ma thag tu, samamantaram) 'ヤウシヤ女のハーリーデー一が [自分の] 領域より帰つてくると、息子のラタは現れず (mi snang nas) 彼は消えてしまつておら (spangs te' sngangs te) [母は] 彼をあまじく家中をうろこ探しまくつたが (khyim khor khor yug tu bltas na) 'しかし現れず、[兄妹の] 子供たちにもラタは現れなかつたので、どこにいるのか (ga re) 彼らにも分からなかつた。[彼らが]、[私たちも見つけることができません。] と言つて、彼女は胸を打ち (brang brdungs nas) '顔色を失つて (mdog nyams shing) '喜ぶことがあつても、目を涙で充たして (mig mchi mas gang nas) '歩みを速めて走り (gros myur bar bgyugs te) 'ローシヤブリンの村 (grong, grāma) や町 (tshong dus) や街道 (srang, vithi) や十字路 (lam gyi bzhi mdo, catuṣpāthā) や三叉路 (lam gyi sum mdo, tripāthā) や庭園 (kun dge' ra ba, āraṃa) や遊園 (skyed mos tshal, udyāna) や湖 (mtsho, saras) や池 (Heng ka, vilva) や沼 (rdzing, puṣkarinī) や祠堂 (lha khang, devāyatana) や会所 ('dun khang, mandapa) '更にはまた狭い家の個処 (khyim dog pa'i gnas) [坊] を探したが、しかしながら得られぬことはなかつた。それから、[彼女は] 上着も羽織らずに (bla gos med par) 茫然自失して (smyos nas) 泣き叫ぶ (ngu zhing smre ba) 'ふいなの (k'yi hnd)⁽²⁵⁾ 息子、ふいなの坊や、ふいなのラタ。」と、なんともなんとも (yang dang yang) 声を出しながら (sgra byin cing) 村 (grong, grāma) や都城 (grong khver nagara) や村庄 (grong 'dab, grāmānta) や都市 (pho brang, pura) や都市部 (pho brang 'khor, paura) などに見つけられた (bltas) が、しかしながら得られることはなかつた。それから、[彼女は] 東方の大海 (gya mtsho chen po, mahā-samudra) に行き、南方と西方と北方の [大] 海にも行つた。[しかし] それら東方にも南方にも西方にも北方にも [息子が] 現

れることなかつた。それから、「彼女は」髪はズンズン (skra zhiḡ cing) 剃き出しの姿になり (sgren nor ggyur) 歩みもろく (gros kyang khyam) 跳ね上がり崩れ下り (yar mchong mar lhungs la) 転び回した (gre)。膝行 (pus mos gro) しゃがみ込んで坐した (tsog pur dug pa) が、そんなやり方で、「彼女は」シャンブードウウ (Dzam bui giṅg, Jambūdvīpa 瞻部洲) の七黒山 (ri nag po bdun, kīādrī-saptaka) を越え、七金山⁽⁴⁷⁾ (gser lta bui ri bdun, sapta parvatāḥ sauvarāḥ) を雪山 (Gangs kyi ri, Himavān parvatāḥ) と大無熱池 (Ma droṣ pa'i mtsho chen, Anavataptamahārṇava) と香醉山 (Ri Dri/Dris rgyas, Gandhamādāna) なじむと探して、それから大声で泣きながら、プールヴァウイデーハ (Shar gyi lus 'phags giṅg, Pūrvavidehā 東方毘提河) とアパラコータニーヤ (Nub kyi ba lang spyod, Aparagodaniyā 西瞿陀尼) とウシタニクル (Byang gi sgra mi snyan, Utarakuru 北俱盧洲) なじむと探しても得られず、その後、等活 (Yang sos, Saṃjīva) と黒繩 (Thig nag po, Kalasūtra) と衆合 (Dus grub, Saṃghāta) と叫喚 (O dod 'bod pa, Raurava) と大叫喚 (O dod cher 'bod pa, Mahāraurava) と熱 (Sreg pa, Tāpana) と極熱 (Rab tu sreg pa, Mahātāpana) と阿鼻叫喚 (O dod cher 'bod pa, Avīci) と頰部院 (Chu bur, Arbuda) と尼刺部院 (Shin tu chu bur, Nirarbuda) と阿比吒 (A ha ha zhes zer ba, Atāta) と阿呵婆 (Ha ha pa, Hahava) と呼呼婆 (Hu hu pa, Huhuva) と青蓮華 (U tpa la/Ud pal lta bu, Utpala) と〔紅蓮華と〕大紅蓮華 (Pad ma chen po lta bu, Mahāpadma) なじむの地獄 (sems can dmyal ba, naraka) にも探したが得られなかつた。その後「彼女は」スメール山 (Ri rab, Sumeru 妙高山) の第一層 (hang rim dang po, prathamā pariśanda) に登り (dzegs) 彼女は第二〔層〕と第三〔層〕にも登って、それから、ヤクシヤの主 (gnod sbyin gyi bdag po, yakṣādhipati) とインゴトーム (Ngal bso bo, Vīśrāma) に尋ねる (ma dris par)⁽⁴⁸⁾ 三十三天の住処 (Sum bcu rtsa gsum lhai'i gnas, Trayastriṃśānām devānām śhānam) にも探して、衆車 (Shing rta sma tshogs, Caitraratha) とンヤルン

遊園 (skyed mos tshal, udyana) と相成 (r'tsub por 'gyur ba, Parusyakka) や雜林 (Dres pa, Misrakavana) や喜林 (dGa' ba, Nandanavana) とらわれる遊園におごつても探し、パーリヤートラニコローヴァダラ (Pa ri ya tra ko bi dā ra, Pārijāta-kovidāra' 円生樹⁽⁸³⁾) の木の前にま行つた。その後、神の集会堂 (lhai 'du ba) にあそび善法 (Chos bzang, Sudharma) とらむれる善見城 (grong khver bzang por snang, Sudarsana-nagara) にも入り、それから、神々の主ンヤクト (OrGya byin lhai dbang po, Śakra devānām Indrah' 帝釈天) の館 (khang pa) ヲンシヤヤ (rNam par rgyal, Viṣṇava' 最勝殿) に行き始めたところ、そこにヤクシヤの執金剛 (Lag na rdo rje, Vajrapāni) など多くのヤクシヤや千人の神々 (lha ston) が占拠してゐた (bzung ba) ので、彼女は直に急ぐ (myur du mgyogs par) 善見城より出た (nas byung ste)。⁽⁸³⁾

(マ) 「それから彼女は」あゝ他の方処に (phyogs gzhan zhig tu) しばらく時を経て (ring zhig dus nas) 結局は (mdor na) 意気喪失してしまつて (yirid chad par gyur te) 、「ヤクシヤの主ヴァィシユラームの面前へ行き、岩の板 (rdo lab) に自分の身体を打ち臥せし (brdabs nas) 、「あんなの息子、どこの坊や、どこのラタ。」と叫びながら言つて、「大將軍 (sde dpon chen po, mahā-senā-pati) よ、だれかが〔私の子供を〕奪つて楽しむことができません (sus phroggs mi dga' na) 〔私は〕子供を求めておぼろび (bu slong na) 探して下さるならお願ひ申し上げませ (stsal du gsol) 』と言つて、ヤクシヤの大王 (rgyal po chen po, mahārāja) ヲィシユラームが答えて、「御婦人 (che zhe, bhagini) よ、悲哀を捨てし (mya ngan thong la) 涙を拭きななす (mchi ma physis shig) 」。貴女の住処に日中居てだれが来たのかを考へななす (soms shig) 』と言つて、彼女は「あの日帰宅直後に擦れ違つて去つたものの姿を思い出して」答えた。「將軍よ、〔来たのは〕沙門 (dge shyong, śramaṇa) ガウタマ (Gau ta ma, Gautama, Gotama' 喬答摩) といひます。」と。彼 (ウィシユラーム) は、「貴女は行つて (de song la) 世尊に帰依するがよい。さすれば貴女に当の息

子ラタを世尊が示すぞよ。」と言った。

(5) すると、彼女は、死んだような状態 (srog stor ba) から再び生き返った (slar myed pa) ちうになつて、急いで直に (rings shing myur du) 自分の住処に行くと、ヤクシャ女のハーリーティーは、仏世尊が三十二大土相 (skyes bu chen poi mtshan sum bu rtsa gnyis, dvātrīṃśan-mahā-puruṣa-lakṣana) で飾られ「八十」随好 (dpe byad bzang po, anuyyāñjana) でお身体を装ひ (sku spras) 千の日光を超えた光の集つたものによりて飾られ宝の山が歩むように停まらぬ (khor khor yug nas) 麗しいのを見るや否や (mthong ma thag tu) 歡喜を生じ、息子のラタを得たように思つて、世尊のいらつしやるところへ行き到着すると、世尊の御足を頭で礼拝して一方に坐つた。一方に坐つてから、ヤクシャ女のハーリーティーは、世尊に次のように申し上げた。「あゝ、ガウタマさま、貴方が私の息子ラタをお示し下さいますようお願い申し上げます。私の息子ラタが見えなくなつてから長い時が過ぎてしまつたのですから。」と言つた。すると、世尊がヤクシャ女のハーリーティーに、「ハーリーティーよ、貴女に子供は沢山いるのか。どれほどいるのか。」と言われたのに対して、彼女は答えた。「世尊よ、子供は五百人でございます。」と。世尊が、「ハーリーティーよ、それなら (de ste) 貴女の五百人の子供のうちの一つがいないからといつて一体どんな禍があるといふのかね (lta ci nyes)。」と仰ると「世尊よ、私のラタが見られなければ(私は)鮮血を吐いて (khrag don por skyugs te) きつと死んでしまつて違ひございませぬ。」と申し上げた。すると「世尊は」「ハーリーティーよ、貴女の五百人の子供のうち一人が見られなくとも「貴女は」このように苦しむのであるから、その人に一人しかいない子供さえをも貴女が殺して食べてしまつてすれば、そのものの苦しみはいかほどのものであるうかの。」と仰つた。彼女が、「世尊よ、「今仰つたものの方が」前のもの以上に (de bas) 苦しみが遙かに大きいですわ。」と申し上げると、世尊は仰つた。「ハーリーティーよ、貴女は子供と離れるといふこのような苦しみを知りながら、どうし

て他人の子供を食べるのかね。」と。彼女は、「世尊よ、私は一体どのようなにせよしようか仰つて下さいませ。」と申し上げた。すると、世尊は、「こちらに来て、私に帰依し、〔五〕学処 (bslab pa'i gzhi, sikṣā-pada) を受け、ラージヤグリハに住んで多くの人々に無畏 (mi 'jigs pa, abhaya) を与えなむ (byin cig)。それすれば、いつに居ながらにして息子の子のラタが見られるやうにきつとなりませよ。」と仰つた。すると、彼女は、「大徳よ、今より以降 (deng phan chad)、〔私は〕このやうに世尊に帰依いたしました。〔五〕学処を受け、ラージヤグリハに住んでいる多くの人々にも無畏を与えるようにいたします (stsal)。」と答えた。その後、世尊が彼女の子供ラタを示してから、彼女も世尊に帰依して〔五〕学処を受け、ラージヤグリハに住んで多くの人々に無畏を与えた。

(○) いつからであつたか (nam gyi tshé)、ハーリーティーが世尊に帰依して〔五〕学処を受け、ラージヤグリハに住んでいる多くの人々に無畏を与えるやうになつた、その時になつて (de'i tshé)、比丘たちは疑惑を生じて全ての疑惑の切斷者 (the tshom thams cad good pa, sarva:samśaya-cchetti) である仏世尊に尋ね、「大徳よ、ヤクシャ女のハーリーティーは、いかなる業 (las, kamma) を作し、いかなる業の異熟 (man par smin pa, vipāka) のゆえに、正氣を失つた (mdangs 'phrog ma, apasmari) 吸人精氣 (te) ヤクシャ女として生まれ、このものより五百人の子供が産まれたのでしょうか。」と尋ねると、世尊が仰つた。「比丘たちよ、ヤクシャ女のハーリーティーによつて作され積み上げられた業 (las byas shing bsags pa, karmāṇi kṛtāny upacāraṇi) は、集積を得 (tshogs rnyed pa, labdha-sambhāra) 機縁が熟す (rkyen smin pa, parinata-pratyaya) じ、洪水のやうに (chu bo bzhin, ogha-va) 身に迫つて (nye bar gras te, prakṛyupasthita) 避けがたいものよ (gdon mi za bar 'gyur, avasṭambhāvim) のゆえに (従つて) ハーリーティーによつて作され積み上げられた業は、他人によつて感受されることばな (nyong bar mi 'gyur, na vedanti'ah)。比丘たちよ、作され積み上げられた業は、外的な (phyi rol gyi, bāhya) 地界 (sai khams,

進んでいる間に、牛飼いの妻が牛乳で充たした瓶を手にしてその道に下りて来たところ、それら準備の料理女たち (sngon zan pa de dag) は彼女を見て、「奥さん (grogs mo) 、「こちらに来て歌を詠いなさいよ。」と言つと、彼女もまた彼女たちと全く同じように舞を踊つたので、彼女の子宮は傷ついて「彼女は流産して」しまった。彼女は怒つて、「上述の」独覚に熟したマン、「ゴーの実 (a mrai bras bu, ämra-phala) を五百個寄進して (phul nas) 願を立て (smon lam brab pa) 、「この善根 (dge ba'i rtsa ba, kusalamula) に祈りまして、私がどこに生まれ変わりますしようと、そのどこにおいてでありましよう」と、「私は」正気を失つたヤクシャ女として生まれ、ラージャグリハの人々の息子と娘を私は奪つて食べられますように。また私にも五百人の子供が産まれますように。」と言つた。比丘たちよ、その時に牛飼いの妻であつたものが、現在のハーリーティーなのであつて、願を立てた力により (smon lam brab pa'i dbang gis, kṛta-prañihāna-vasāte) このよつに生まれたのである。」と。

註

- (1) 拙稿「仏教文学におけるインド説話流布の事例研究」『駒沢大学仏教文学研究』第二号(二〇一九年二月)、五九—八八頁の七四頁で触れた「ソロモン伝説」に関連して、山部博士より頂戴した同年三月四日付け私信にて、これと類似の話は、『旧約聖書』「列王紀上」、第三章、第二一—二八節に求めることができるのではないかとの御指摘を含む種々の御教示と共に、二〇一七年に開催の「怖い絵展」に展示された、その話に基づくジャン・ラルーの「ソロモンの判決」というカタログ中の絵のコピーまでお送り頂いた。論ずべきことは多いのかもしれないが、ここでは、深謝の意を表すことのみに止めておきたい。
- (2) ヴァイシユラヴァナのインドのクベーラから日本の大黒天に至るまでの神話形成の詳細な研究については、彌永信美『大黒天変相 仏教神話学Ⅰ』(法蔵館、二〇〇二年)を参照されたい。

(3) 以下の文献中、チ『雑事』Pに基づく話の要約は Jampa Losang Panglung, *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung*, Reiyukai Library, Tokyo, 1981, pp. 196-197 に示われよう。また、漢『雑事』に基づくとそれは、彌永前掲書、一〇六一二二頁に、関連文献への示唆も含みながら、やや詳しく示されているので参照されたい。

(4) この二編の拙稿の掲載は、前者が、伊藤瑞穂博士古稀記念論文集『法華仏教と関係諸文化の研究』(二〇二三年、山喜房仏書林、六九七―七二四頁、後者が、『松ヶ岡文庫研究年報』第二八号(二〇二四年)、六三―九九頁で、体裁はもとより、内容上も、律藏中の説話の問題としては関連があるので、その観点からも参照して頂ければ幸いである。

(5) 後註18で示す彼の息子の名「サータギリ」が根拠のあるものであることにより、父の名が「サータ」であることは確実。国『雑事』、五五九(二二三)頁、脚註38も、女性名詞としているのは不可であるが、やはり Sata と推測している。なお、話の因縁を示す、この直前の(0)段にある鳥 (Gya) に因む庭園名「カランダカニヴァーパ」は、漢『雑事』の対応箇所中にはない。このことは場合によっては問題となるが、今は触れない。

(6) Magadha は、チベット訳中においては音写されるのが一般的と思われるが、ここではそうでないことに注意。しかも、Pでは、Dと違って、P中におおむね“mNyam ka”あるいは“mNyam dka”と表記に不一致が見られるので敢えてカッコ内には併記しなかった。

(7) DPPともに“dang”を欠くが、同様な文である、後註、10の場合に照らししても、当然あるべきと見做して、ここに“dang”を補って訳した。

(8) ここでの“*ḥḥ*”の用法には、私に不明な点も多いが、一応「に属する」とし、少し先の「比丘」以下の語に係るものと理解して対処した。なお、これ以前に列挙されている人々の集る「村」や「都城」などについては、律藏、例えば、『出

家事』 Helmut Eimer (ed.), *Rab tu byun bai gzi. Die tibetische Übersetzung des Pravrajāvastu im Vinaya der Milasarvāstivādins*, 2. Teil, Wiesbaden, 1983, p. 265, ll. 9-10: *Diryāvadāna* (Cowell & Neil ed.), p. 332, l. 7 など。また大乘経典 例へば *Saddharmapuṇḍarīka* (Kem & Nanjio ed.), p. 102, ll. 5-6 などには *grāma nagara nigama palli-pattana* と *grāma-nagara-nigama-janapada-rāstra-rājadhāni* も *chubz* それらのチベット訳を点検する必要があるが、ここでは、これ以上触れな。

(9) これらの語句を含む定型句については、平岡聡『説話の考古学』(大蔵出版二〇〇二年)、二五七―二五八頁、A、B、参照。しかるに、この三語のサンスクリットに対する一般のチベット訳は、*’rse bar byed/ dga’ bar byed/ dga’ mguṣ spyod par byed de’* と思われるが、チ『雑事』では、これ以降も、カッコ内に示した訳語も *chubz* に注意。

(10) *chubz* は、前註7の場合と異なり、*’dang* があり、これが正しい。

(11) これらの語句を含む定型句については、平岡前掲書(前註9)、一六一頁、H、参照。しかるに、このサンスクリットに対応する普通のチベット訳は、*’gzugs bzang po lha na sdug pa mdzes pa(mo)* と思われるが、*chubz* は同じ原語に対する訳語の相違と見做しておく。因みに、私の狭い経験からではあるが、チ『雑事』には、一般的訳語と若干異なる訳が使用されているのが、前註6、9などのように散見される。後註12、29、35、41なども参照。なお、私の狭い経験から序に言っておけば、チ『雑事』には、一般的訳語の相異のみならず、前註6の音写語の場合に認められるような、DとPとの間の相異もかなり多く見られる。その典型的な例が、特に註記はしなかったが、(6) 段中に認められる手紙を「読んで」(*bklaḡs teblags te*) の場合である。Pによれば「聞いて」の意となるが、相異の起因は未定。原文の違いとも考えられるが、本訳では、翻訳上で起ったこととして処理した。

(12) *’jati-maha* に対する一般的チベット訳語であれば、*’bisas ston* のみで *’chen po* は不要。*’maha* を *’mahā* と誤解

したとは考えられないが、別にあつた形容詞“mahā”が“chen po”と訳されたか、“cher(盛大に)”と訳されるべき語が“chen po”と語記されたかのいずれかであろう。後註14、および、(θ) 段末尾の同様の表現も参照のこと。

(13) 彼女のサンスクリット名は、彌永前掲書(前註2)、一〇六一—一〇七頁も示すように、“Nanda”と推測されることが多いが、根拠は、その息子の名“Piyānikara/Piṅgala”と共に、“必ずしも強いものではない。私もまた確実な根拠を見出し得たわけではないが、この母子の關係は密接であるゆえ、その名も”(θ) 段で示される母“dGa'byed ma”に対する子“dGa'byed”のように、密接でなければならぬ。しかるに、従来の両者間にはそれが認められないので、本訳ではあくまでも暫定的ではあるが、母を“Ratī”、子を“Rata”と従来とは別な名を想定しておく。Ratī(रति)は Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, New Haven, 1953, p. 450 の“Ratī”の項参照。また、Mahāvastu (Senart ed.) III, p. 286, l. 6 ㊦ 指示されているが、その例では、マールラの三人娘の一人。なお、後註25も参照のこと。

(14) ここでは、前註12で注意を喚起したと同様の表現において“cher”とある。
(15) 「予め」の訳に自信はないが、後註21の個所に呼応する文章。実際の結婚に先立つ約束について用いられている語と考えられる。

(16) チベット訳は“de skyed cing”とあり、文字通りには、他動詞でしかも継続を示しているから、「彼女を生ませつ」とすべきかもしれないが、意味を優先して訳した。

(17) ここには他の同様の表現にある“nams kyis”がないが、あるとして対処した。

(18) 前註5と呼応する問題でもあるが、Sātagin であることの確実な根拠については、赤沼智善『印度固有名詞辞典』(破塵閣、一九三〇年、法蔵館復刊、一九六七年)、六〇四頁、Edgerton, *op.cit.*, p. 590 参照。Sātagin か Satāgiri かにについては、本話においては、子供の両親の父の方が強調されているので、前者が採用されている。

- (19) この箇所の訳には自信がない。
- (20) この箇所のチベット訳は、*dei dus kyis reu pa las na geugs su mi brubs pa* であるが、訳には全く自信がない。特に前半はそうであるが、文脈上、上述の「誤った願の熏習による被着のために」と同趣旨と見做して訳したに過ぎない。後半は、右註の場合とほぼ同じで、実質的に異なるのは、否定の“ma”が、ここでは“mi”になっているだけであるから、やはりよく分からない。“mi”に変わっている分だけ、能動的な意味が強まるはずであるが、正確な意味が分からないので、否定辞を含めて、この訳にも自信がない。
- (21) 前註15参照。この訳も余り自信はないが、事態は、亡き父の先の約束を指す。
- (22) この語は、普通「娘」と理解すべき語であるが、サータギリから見れば「姉」なのでかく訳したものの、パンチャーラにとっては、やがて義理の娘になるので、弟は自分の立場からではなく、手紙の相手の立場から「娘」と書いているのかもしれない。
- (23) インドの結婚式の詳細について私は不明。「大吉祥を結び付け」とは、正式な結婚式が円成したことの意味なのかもしれない。
- (24) チベット訳文は、*mo nam mdza' zhing spobs pa dang dga' zhing yid bde ba mang por gyur pa* で、余り分からず良い訳とは思われないが、ガンダーラに嫁いだラティーが、異国での一定期間を経て、夫パーンチカと慣れ親しんできた状態を表しているであろう。
- (25) 前註13参照。なお、ここで、漢『雜事』の訳者本人である義浄の『南海帰寄内法伝』でのハーリーティー（ラティー）母子に触れた一節を紹介しておけば、大正蔵、五四卷、一〇九頁中：宮林昭彦、加藤栄司『現代語訳 南海帰寄内法伝』（法蔵館、二〇〇四年）、六六―六七頁である。しかるに義浄は、ここでも、子の名を音字ではなく「愛兒」とする。
- (26) これ以降、ラティーには、ヤクシヤ女が形容詞のごとく冠せられる。
- (27) ラティーは遠国のガンダーラに嫁いだわけであるが、これ以降は、隔った生まれ故郷のラージャグリハにも自由自在に

出没できるようになったことを意味するであろう。

(28) チベット訳文は、*“de dag gis yang phrogs par gyur nas”* で、直訳したつもりであるが、よく分からぬ。このままでは、捜索に行った役人までが物取りになって被害が拡大したという意味になってしまうが、それでもよいのかもしれないもの、不明。

(29) 「石や砂利」以下ここまでの文については、平岡前掲書(前註9)、一五六頁、定型句、2. C. 参照。カッコ内のサンズクリット語はそれによる。チベット訳はここでも一般のそれとの違いを若干示しているが、必要と思われる比較も、ここでは省略したい。

(30) これに対応するチベット語は、「(子を)奪う女」という意味である。

(31) この *“anukampam upadaya”* に対応するチベット訳は必ずしも一様ではないが、今のが有力な一例であることは確実。私は、この用語の重要であることについては、拙稿「大乘仏教成立状況の解明に資する文献」(初出、一九九三年)『仏教教団史論』(大蔵出版、二〇〇二年)、二三二―二三三頁以来、種々論及してきたが、最新のものは、拙稿「仏教経済思想研究序説(一)」「(二〇一八年十二月脱稿なるも、投稿先との都合で現在未刊)(特に、註41参照)である。ここでも、述べたいことは多いが、機会を俟ちたい。

(32) 語を補って「(自分の)領域」と訳した *gocara* は、彼女の故郷マガダを指そう。

(33) この語は、純然たる感嘆詞なので意味をもたせるべきではないが、便宜的処置。

(34) 以上の「七黒山」はジャンブードゥヴィーパ内の七つの山、「七金山」は妙高山を中心とする九山から中心の妙高と一番外の鉄輪圍を除いた七つの山である。

(35) *“hō shā’ Abhidharmakoshaśya (Pradhan ed.)”* (以下 *AKBh* と略す) などの一般的なチベット訳では、*“Ri spos kyī”*

ngad Idang ba”とされるが、それと異なることに注意。

- (36) 「等活」よりこままでが八熱地獄、これ以下「大紅蓮華」までが八寒地獄である。
- (37) ヴィシュヴァーマの想定は暫定的なものであるが、「尋ねることなく」とは、そのヤクシヤの主にお伺いを立てることなく通過したことを示す。しかし、意気消沈した彼女は次の(v)段で再び彼の面前に戻ってくる。その時の肩書は「主」ではなく「大王」である。
- (38) 四遊園と田生樹については、AKBh, p. 168, ll. 4-12²、これを含めた先の瞻部洲に始まる彼女の探索場所については、AKBh, p. 157, l. 22-p. 168, l. 14 : 山口益 舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』(法蔵館、一九五五年)、三六一—四〇七頁参照。因みに、この註記箇所「田生樹」の直前にあるサンスクリットは、AKBh に従ったものであり、その前にあるチベット訳の音写とは対応していないが、その音写と対応するサンスクリットについては、Edgerton, *op. cit.*, p. 343 の“pāṇiyātra”の項を参照されたい。
- (39) “byung”は自動詞で彼女が「出た」のであるが、漢『雜事』では「驅出」されている。
- (40) このチベット訳のままでは、「彼女」が行ったことになるが、原文には“bhavan gacchatu”とあったと見做して、「貴女は行くがよい。さすれば」のような意味で訳した。
- (41) 以上の定型句については、平岡前掲書(前註⑨)、一七三頁、B. 参照。その中のこのチベット訳は、普通“samtatatah”に対しては“kun nas”であるのに、ここでは全く別な形態を取っていることに注意。和訳はこれを活かしたつもりである。
- (42) 両者の対応は、Lankāvatāra (Nanjio ed.), p. 262, l. 12 の原語と、そのチベット訳による。後者によれば「顔色を奪った女」であるが、ここでは前者の原語の意味も加味。
- (43) 世尊の比丘の疑惑に対する、ここに至るまでの返答は、典型的な定型句をなすが、これについては、平岡前掲書(前註

9)、二六七―二六八頁、6. A. を参照されたい。なお、この定型句に関する問題の若干については、前掲拙書(前註31)、一三三―一三六頁参照。

(44) じこにおける“*pradakṣiṃya*”は“*dakṣiṃya*”と同義であるが、この語については、前掲拙書(前註31)、四三―四二五頁を参照のこと。なお、この語を含む、以上の「独覚」に関する定型句については、平岡前掲書(前註9)、一六七頁、B. を参照されたい。

(45) “*zau pa*”が「食物に関するもの」として「料理女」を意味しうるとしても、“*ṣaṅgon*”の働きがよく分らない。「前に」と副詞に取るべきかとも考えたが、以下でも同じ語句が再度全体で名詞のように扱われているので、暫定的に「準備の料理女」としておいた。漢『雜事』には、これに相当する語句は見当たらないようである。

(二〇一九年七月十二日)